

Title	杭州通判在任中の蘇軾の交友について
Author	西野, 貞治
Citation	人文研究. 21 卷 4 号, p.326-339.
Issue Date	1970
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

杭州通判在任中の蘇軾の交友について

西 野 貞 治

熙寧三年八月謝景温から居喪服除に蜀往還の際の賈販のことを弾劾された蘇軾は、そのことについては敢て弁明せず、翌年六月外任を願い出て杭州通判に任ぜられ、十一月杭州に着任した。七年九月密州の知州に転任するまで、三箇年を杭州ですごした。

当時の杭州は、十余万戸の戸数を有する東南有数の大都会で、水陸の要衝にあたる物資の集散地として、また海舶の出入する貿易港として殷賑をきわめていた。そして蘇軾には、湖山映帶する明眉な風光と、温潤な氣候が、中央での三年間の緊張が招いた憔悴をいやすのに適していると思われた。蘇軾の才能を惜しむ神宗皇帝が、中書の辞令を改めさせて杭州通判に任じたのも、こういう配慮からであつたろう。しかし、このような期待は、間もなく空しいことが明らかとなった。杭州のような重要な地の通判は知州の資序の人を以て充てることがのぞまれていたし、ときには通判が知州の任務をとることもあったが、事務の繁忙に心ふさがれる思がした。この間の情況は、彼の「密州謝表」に「ひとたび闕庭を離去してより、しばしば歳籥をあらため、筆硯に塵埃おいて、漸く旧学の渊源を忘れ、簿書に奔走しては、ほぼ小人の情偽を識る。」ということでも明らかである。清人紀昀が『査注本』に施した批で、「東坡を以て湖山に管領となる、よろしく高唱あるべきに、此の卷警策の作かえってはなはだしくは多からず、あに吏事に繋る故なるか」（卷八）とか、「わずかに杭州を出でて、詩は深く警むを便とす。あに胸中の清思半ば簿書に耗し、半ば游宴に耗したるに非るか。詩は力を静むるに非れば工ならず。東坡の天才と雖も、また膠膠擾擾の中においては揮洒意の如くなる能わず」（卷十一）と、杭州でも、属州行部中でも、佳什が少いことを言う。「紀批」の当否はともかく、通判の職務の繁忙は、蘇軾自らも言う通り事実であつた。

弟の蘇轍は、「東坡先生墓誌銘」で「はじめ公すでに外に補せらるや、事の民に便ならざるもの有るを見ば、敢て言わず、また敢て黙視せず。詩人の義により、事に託し以て諷し、国に補うことあるをねがう」と称するように、この時期の蘇軾の詩には忌憚ない政治批判の作が多いのである。元豐二年蘇軾が詩獄に坐したときの、御史臺での蘇軾の供述を録した『烏臺詩案』を検すると、この時期の詩で問題にされたものが最も多い。そしてそれらの詩はこの時期の交友との唱酬の作に多い。

蘇軾の詞は、詩を以て詞を作ると評されたように、詠懷の作が多いが、この時期にすでにそういう詞風を作りあげつつあった。詞に於ても、詩におけると同様唱酬の作が多かった。小稿では、彼が詩詞の唱酬をなした当時の交友について考察し、蘇軾が政治批判の詩を多く作り、詞の領域に踏み出して行った背景を明らかにしたい。

一 杭州の知州たち

蘇軾の杭州通判在任中の三年間に、彼の上官にあたる杭州の知州が二度交替して、三人の知州に接している。呉廷燮の『北宋経撫年表』によれば、熙寧五年五月には沈立が去って陳襄が知州となり、七年六月には陳襄が去って楊繪を迎えている。

この三人の知州のうち、蘇軾と親交のあったのは、陳襄と楊繪とである。

陳襄、字は述古、古靈先生と号び、福州侯官の人である。『宋史』にも、『東都事略』にも伝があるが、宋の葉祖洽の集中の「承奉郎守秘書省著作佐郎知太常寺陳先生行狀」はもっとも詳細であり、陳曄の「陳古靈先生年譜」は詩文、官職の繫年がそなわっている。『続資治通鑑長篇』によって新法反対の様子を見よう。熙寧二年夏尚書刑部郎中修起居注に任ぜられてから、神宗の信任とくに厚く、中央の要職を歴任した。王安石の青苗法・均輸法には「陛下は至仁を以て治を求む。凡そ法度を更張せんと欲するは、皆もって民の為とす。いづくんぞ民の脂膏を取りてもって貸息となし、しかも周公の太平にすでに試みし法と謂わんや。陛下の心は必ずこれとなさず。しからばすなわち、天下の人はみな知る。陛下を誤らす者は王安石なり、安石を誤らす者は呂惠卿なりと。陛下の聡明をもって、天下の論議を觀ば、その法制的利害はもとよりすでに灼然として知るべし。いかにぞ安石強弁を恃んで以て前に熒惑し、惠卿詭謀を画してもって後に陰に助け、加うるに比周の小人を以て随時に觀望す。平日の公論は、すなわちことごとく其の法の非なるを知るも、一たび利に撓められては、すなわちまたその法の是なるを言う。これ陛下の至聖といえども、惑うなきあたわず。臣等の至忠といえども指して朋党となすを免れず。…」(卷二一〇)と、すべてが王安石と呂惠卿の罪であるとまで極言している。神宗は王安石の反対を抑えて、固辭する陳襄を試知制誥に任じた。王安石は、陳襄を忌み嫌ったのは当然である。それから五箇月後の熙寧三年九月、神宗に対して陳襄らの拔擢に反対して「陳襄の邪慝、下に附いて上を罔し、陰に姦党と合して、訛を興し訕を造し、以て時事を乱す如きは陛下必ず已に明に知る。陛下はつねに臣に崇奨せんと欲するも、誠にいわゆる今の道に違ひ衆を合して功を妨げ能を害うの臣は多からずとなさざるを知らず。陛下また襄のごとき者をすすめてこれを助くるは、時事において損なしとなすや、損ありとなすやを知らず。……それ礼義を知らずして、敢て驚誕をなして、もって聖聰

を疑惑し、悦を姦人にとることかくの如し。若し陛下は徒に、左右游談の助多きを以て擢用せば、これすなわち流俗の勝る所以にして裏の計中なり」(巻二一五)と言上した。陳襄を「談助」の臣として扱ったのは、神宗が彼の経術を重んじたことに対する王安石の反撓でもあった。陳襄は翌四年七月には知制誥にすすんだが、八月には詔書を草したときの過失を問はれて陳州の知州に転出する。

治平三年陳襄は蘇軾の父蘇洵の葬に臨んで「蘇明允府君挽詩」を作っているし、熙寧二年以来陳襄と蘇軾がほぼ同じころ中央にいたので、二人は当時すでに相識であったと思う。知州と通判として、杭州での二人の交はほぼ二年に亘る。陳襄の人柄について『東都事略』は「好んで人材を薦達し、喜愠色にあらわさず」と述べるが、十九才も年下の蘇軾を、すぐれた政治感覚をもち文学に秀でた友人として待遇した。そしてともに王安石の新法反対者であることが二人の交友を密にした。

二人の交友は、詩の唱酬の多さではかられる。蘇軾の詩集には陳襄との唱酬を示すものが二十五首もある。ことに燕席の作が多く、ついで花が多く、月や雪に関するものもある。吉祥寺の牡丹の花が咲くころ、蘇軾は吉祥寺に花を観て、陳襄のまだ来ぬことを知り、花に託して陳襄の観花をうながす詩を作ると、そのことを聞いて陳襄は翌日吉祥寺を訪れた。二人は卯酒をくみ交し、さらに前の韻を用いて詩をつくるという、うちとけた交際であった。陳襄は属県の県令などをも含めて宴を設け、また詩を唱酬することが多かったが、蘇軾がその会に赴かぬと詩をもって責めることがあった。それに答えた詩の中に「北山怨鶴休驚夜、南畝巾車欲及春、多謝清詩屢推轂、豨膏那解輒方輪」と詠むのは、蘇軾にはすでに官界引退の鞏固な決意があつて、陳公から朝廷に自分を推薦するという詩をいただいても、それにこたえられぬという詩意である。こういう率直な辞退をなし得る程の親しさが二人の間にはあつたのである。またこの頃冬の日、陳襄はある寺で牡丹の花数朶が開くのを見て絶句四首を作ったが、それに和した蘇軾の作が詩獄の材料となった。「一朵妖紅翠欲流、春光回照雪霜羞、化工只欲呈新巧、不放間花得少休」と、鮮かな紅の牡丹の花が、ときならず咲いたのを賞した詩が、化工を執政に、間花を小民にたとえて、時の執政が新意を出して擘画するため、小民がしばらくも休息しえぬことを詠んで執政を譏諷するものであると強解される。このような無理な穿鑿をすれば譏諷と解しうるものは他にもある。陳襄が拒霜花を詠んだのに和した蘇軾の「千株掃作一番黃、只有芙蓉独自芳、細思却是最宜霜」は、拒霜花即ち純白の花をもつ芙蓉の花が、霜を拒む花と命名されていることが都合である旨を詠んだものである。劉辰翁の「宛膩として情あり」という批を、本邦の禅僧一韓の『蕉雨余滴』では、世は王安石の党に一変したこの時に陳公のごとき節義の士のあることを称える意を寓していると説いているが、これは陳襄の詩の末句に「此心応不畏秋霜」という強烈な表現があるのを見ても一韓の説をと

りたい。新法反対派同志という安心感から、平素の感懐が漏らされたものと思う。

『東坡樂府』には、蘇軾が陳襄に贈った詞に、行香子「丹陽寄述古」、卜算子「自京口還錢塘，道中寄述古太守」，虞美人「有美堂贈述古」，訴衷情「送述古，遯元素」，菩薩蠻「西湖送述古」，清平樂「送述古赴南都」，南鄉子「送述古」がおさめられている。また当時杭州にいた詞人張先にも熙州慢「贈述古」，虞美人「述古移南郡」がある。その多くは熙寧七年六月陳襄が応天府に移ることが決ってから送別の詞であるが，陳襄の作は一首も残らぬ。張先の「熙州慢」の前調に「武林鄉，占第一湖山，詠画争巧」という句があるから，陳襄もともに詞を唱酬したであろうと考えられる。『侯鯖録』には陳襄が杭州知州のとき，蘇頌を招いた燕席で官妓周韶が立所に一絶を賦したのを賞して落籍を許したことが見えるが，この風流人に詞を解せぬことはなかったであろう。

楊繪，字は元素，漢州綿竹の人で『宋史』にも，『東都事略』にも伝がある。陳襄と同様新法反対派であった。その部分の叙述は『統資治通鑑長編』に詳しい。楊繪は熙寧三年十二月に翰林学士，四年四月には，御史中丞となった。これよりさき，馮京が御史中丞を退いてから空席となっていたのを，神宗は韓維を以て充てようとしたが，王安石のすすめで楊繪に決したのである。楊繪は，檢正官の不職や助役法に対する民間の不安などを相継いで奏上した。楊繪と王安石の意見の対立が著しくなったのは，熙寧四年五月十四日，東明県（大名府）の県民が，大挙して入京し助役錢の賦科の不当を訴えたことが発端となった。王安石は窮して疾と称して家に臥し，召されて神宗の問に対し，県令賈蕃と密院の官僚の結托は不明であるが，諫官の中にも流俗に附する者がある旨を言う。楊繪は助役錢を上から下へ機械的に分配することで民心を甘んじ服せしめ得ずとして，「譬うればかの帶をなす所以の者は腰のためなり。履をなす所以の者は足のためなり。帶の長短は須らく腰の豊瘦に従うべく，履の闊狭は須らく足の大小に準ずべし。今もし帶長くして余あれば，則ち腰を増して以てこれを満たし，履狭くして足らざれば則ち足を削りて以て之をなせば可ならんや」と，等第を超え升して助役錢を多く出させるのはこのことに異ならぬと言う。さらに楊繪は，東明県々民の訴に関し，県令賈蕃を処分すれば民言を塞ぐことになると反対する。翌六月一日，王安石は神宗に対し，楊繪は官職に置くべきでないこと，楊繪によって王安石が察せられるいわれのないこと，彼のごときものが言路にいて，四方に力をのばせば，奉法の臣が疑い畏れて政令が行われず，朝政は成功をのぞみ得ぬと楊繪を非難した。楊繪は助役法について，更に幾回か奏して，王安石が姻家の故を以て無能の曾布を異例に拔擢したことを攻撃した。王安石は楊繪の言う所は不平から出たものであり，私怨によるものと上言した。神宗は楊繪を翰林学士御史中丞か

ら、翰林侍讀学士に落し、二日後に鄭州の知に任じ、さらに数日後亳州の知に移した。

なおこの時期に、蘇軾は熙寧四年の正月から三月にかけて「三言」を續いて上奏しているから、楊繪と蘇軾は相識であつたろう。熙寧七年六月、応天府の知府から杭州に移った楊繪は、その年九月に翰林学士として中央に戻るまでの三箇月間を、通判の蘇軾とともに杭州で過ごすことになる。楊繪と蘇軾の年齢差は九才、反新法派で、「東都事略」にいう放曠不羈の性格であれば蘇軾と意気投合するのも当然であつた。この三箇月間に蘇軾との唱酬を示す詩は一首である。ただ詞の唱酬は十一首にも及ぶ。『東坡樂府』には訴衷情「送述古，遯元素」と菩薩蠻「杭妓往蘇，遯新守楊元素，寄蘇守王規甫」，泛金船「流杯亭和楊元素」，南鄉子「和楊元素，時移守密州」，同「和楊元素」，同「梅花詞，和楊元素」，浣溪沙「自杭移密守，席上別楊元素，時重陽前一日」，同，南鄉子「沈強輔受上出犀麗玉作胡琴送元素還朝，同子野各賦一首」，同，定風波「送元素」，菩薩蠻「潤州和元素」，醉落魄「席上呈楊元素」があるが、楊繪の詞は伝るものはない。蘇軾の詞に「和楊元素」と題するものが幾首もあるから、楊繪もともに詞を唱酬したことは明らかである。楊繪は詞については博識の人で、詞の本事をあつめた『本事曲集』の著があることは『苕溪漁隱叢話』や『東坡詞』の注から知られる。そしてその書の完成に蘇軾が協力していたことが注意される。蘇軾が黃州にいる時楊繪に寄せた書簡の中に「近ごろ一相識は公明の編せられたる『本事曲子』を録し得たり。奇聞を広めて、以て閑居の鼓吹となすに足るなり。然れども切に謂う、よろしく更にこれを広むべしと。ただ知識の間に囑して、各をして聞く所を記せしむれば、すなわち所載日にますます広まらん。すなわち三事を献ず。更に揀択を乞う。伝えて百四十許曲に到らば、知らず、伝え得るに足るや否や」とあるのを見ても、その書はそれほど完璧なものではなかったろう。『中興紀聞』には「『楊元素本事集』に誤って蔣堂侍郎に小鬟の紅梅と呼ぶあり、吳殿丞此の詞を作って之に贈ると為す」と、吳感が侍姫紅梅を住ませた閣を紅梅閣と名づけて、「折紅梅」の詞を作った本事を誤ったことを指摘している。この書簡は蘇軾の杭州通判時代のものでないが、楊繪の詞への沈潜を示すものとして引いておく。なお、この時期の蘇軾と楊繪の詩の唱酬は、蘇軾の詩集によると「八月十日天竺山送桂花分贈元素」の一首のみで、『施注』は「二公の長短句の倡酬は凡て七八なるに、詩はただ兩章のみ、その一は黃州にありての次韻なり。恐らくは寂寥かくのごとくにあらざるべし。疑うらくは亡逸あるのみ」とするが、『烏臺詩案』に楊繪との詩の交流がとり上げられていないことでこの疑問は水解されよう。

二 近州・領県の知州・知県たち

当時の杭州刺史は鎮江・平江二府と杭・湖・常・秀・嚴五州と江陰一軍を領していたが、杭州通判としての蘇軾も、これらの府州軍の知州たちと交る機会が多かった。そのなかで交渉のことに多かったのが湖州刺史の孫覚である。また杭州の附郭の錢塘県知県の周邠とも交友が著しかった。

孫覚、字は莘老、高郵の人。その伝は『宋史』、『東都事略』にある。王安石に反対して中央を逐はれた経緯は『続通鑑長篇』に見える。熙寧二年十一月己巳、右正言直修賢院孫覚は修起居注に任ぜられた（拾補卷六）。はじめ神宗は蘇軾をも用いようとしたが、王安石の強い反対で実現しなかった。『宋史』には王安石は早く孫覚と善かったことを言い、王安石の「与孫莘老書」によっても、王安石が孫覚を朋友を以て遇していたことがわかる。少くとも、この頃は二人の反目がなかったはずである。熙寧三年正月、孫覚は右正言李常とともに青苗錢の分配が民間の不平をよんでいることを言い、その後、「竊かに見るに、制置三司條令司は文字を画一にして天下に頒行し、官吏を曉諭す。その凡七あり。斂散出入の幣を論ずるに至っては、陷失を将来す。人の能く知る所のものは、皆置きて論ぜず。乃ち經義を援引し、以て先王の法を付会し、与に微を防ぎ漸を杜ぎ、以て怨を召き禍を買わんとする者は、臣得て之を直陳せん。其の條三あり」という疏を進呈した（拾補卷七）これが「宋史」にみえる王安石の怒を買った奏とほぼ同時のものであろう。その後孫覚は神宗に見えて、青苗法のことを論じて、「條令司韓琦を駁する疏を板に鏤して下に行うは、陛下の勲旧大臣を待つ所以の意に非ず。頼に韓琦は樸忠もとより他慮なし。もし唐末五代藩鎮強盛の時に当れば、あに国の為に事を生ぜざらんや」と、王安石の計謀を非難した。熙寧三年三月、孫覚は知廣徳軍に降された。左遷の直接の理由は、開封の界に常平錢を散じて抑配があるといはれた時、一旦はその事実調査の詔命を奉じながら、結局その行を辭した責任を問われたものである。神宗は修起居注を落し館職にしようとしたが、一州或は軍を与えた方がよいとする王安石の主張にしたがったのである。

蘇軾の「墨妙亭記」によると孫覚は熙寧四年十一月廣徳軍より湖州に転任した。蘇軾の杭州着任とほぼ時期が同じであった。翌五年七月、蘇軾は属県を循行して余杭に至り、法喜寺後の緑野堂に宿し、孫覚を懷うて作った詩の末に、「烹魚得尺素，好在紫髯翁」どあるのは、孫覚から蘇軾に書簡が寄せられ、紫髯翁孫覚の無事なのを喜んで、此の詩が作られたことが知られる。これより先、五年二月、孫覚は湖州に墨妙亭を完成し、書を寄せて蘇軾に墨妙亭の記を作って自署することを求めて来た。この年の十二月、蘇軾は運塩河の開鑿を監視する為湖州・秀州に赴いた。出発に当って蘇軾は「将之湖州戲贈莘老」を、さらに到着後には「再用前韻寄莘老」を作って孫覚に贈っている。「墨妙亭記」に「莘老ますます賓客を喜び、詩を賦し酒を飲んで樂をなす」というように、蘇軾の湖州訪問を迎えて詩の唱酬に耽った。この後の詩に「江夏無雙応未去，恨無文字相娛嬉」と、後漢の

黄香に擬せられたのは、自注に「黄庭堅は莘老の婿、文を能くす」とあるように、後に蘇軾の詩の門人となった黄庭堅であった。蘇軾の「答黄魯直書」に「軾はじめて足下の詩文を孫莘老の坐上に見、聳然としてこれを異とし、以て今の世の人に非ずとす」とあるのはこのときのことである。蘇軾とその門下の詩の唱酬は、すでにこの時端緒となる機会があったのである。蘇軾と孫覿は中央にいる時から相識であったろうから、新法反対者としての素懐が唱酬の間に出てくる。同じく湖州に赴いた時の作「贈孫莘老七絶」の第二首に「作隄捍水非吾事」という句を詠むのは、劉辰翁の批に、「閑情恨意俱に見ゆ」とある如く、提を作り水を捍ぐことは己が責務でないとする解放感から閑情がよび起されるであろうし、こういう態度が恨から発するものともとれる。この句が新法派から時政を譏諷すると指摘されたのもむりはない。

杭州通判時代の蘇軾の交友のなかに、知名人ではないが詩交のもっとも密な人物として、銭塘の人、周邠、字は開祖があげられる。蘇軾と同才であるが、嘉祐八年に登第したことが『咸淳臨安志』や『萬曆銭塘県志』で知られる。彼と同時に銭塘からは沈括が合格している。銭塘県治は杭州府治の附郭中にあるが、その知県として杭州府通判の蘇軾の湖山の遊に伴うこと多く、詩の唱酬がきわめて多い。呉自牧の『夢梁録』の「歴代人物」の條にもこの人の名が見え、蘇軾の詩友としてかなり有名であったらしい。ただ彼を銭塘県の知県とするのは『王註』の趙堯卿の説で、『王註』よりあらゆる点ですぐれ、ことに歴史的考証に正確な『施註』は全くこのことにふれず、『萬曆塘県志』の銭塘知県四十九人の中に周邠の名が見えない。そのため『合注』では彼を銭塘知県にすることを疑っているのはもっともなことである。呉騫の「蘇祠從祀議」は周邠を銭塘知県とするが、厲鶚の『宋詩紀事』では知県としてはいない。清朝でも著名な博搜の学者であった二人の説に、拠る所が明らかでないのが惜しまれる。蘇軾と周邠の詩の唱酬は、熙寧六年春から七年春周邠が銭塘を去って京師に赴くまでの約一年間の作がきわだって多い。

熙寧六年秋蘇軾は属県を循行しての途次臨安の名勝徑山に遊んだ。その時伴ったのは周邠と秀才李行中で、二人から寄せられた詩に次韻した二首の前一首の中で蘇軾は「独有汝南君，従我無朝暮，肯将紅塵脚，暫著白雲屨」と詠むが、周氏は姬姓より出た汝南の著姓で、ここに言う「汝南君」は周邠をさして言う。この句を見ても蘇軾は周邠を自が意を解する者として、特別な目で見ていたのである。またの日、同行する者もないまま1人で徑山を訪れたところ、明朝意外にも周邠と李秀才と臨安県令蘇舜華がともに徑山に至るのに会した。そして周邠の詩に次韻した蘇軾の詩に「明朝三子至，詩律嚴号令・籃輿置紙筆，得句輕千乗」と、三人との唱酬の詩律の厳しさと、得句の楽しさを詠むが、三人と云うものの

周邠を意識してのことであつた。また同じ六年の初秋・病中ひとり浄慈寺に遊んだところ、それを知って周邠が寄せた詩に蘇軾が次韻したが、その中で「我与世疎宜独往，君縁詩好不容樊」と、周邠は詩の名手であるから敢て唱酬は試みぬと言う。密州知州に転出後に蘇軾から周邠に寄せた書簡に「別後山水佳き処に到れば，未だ賞て談笑せしを懷想せずんばあらず。京を出でて北去せば，風俗すでに椎魯にして，詩酒に游従すること開祖の如き者は，あにまた得べけんや乃ち知る，さきの楽は得て継ぐべからざるを。……然れども詩人いまさず，大家の三五十首の唱酬を省し得る，また細事に非ず」と、杭州に於ける周邠との唱酬の楽しさを追懐している。それほど蘇軾は周邠の詩才を買っていたのである。ただ蘇軾と周邠は心をゆるした友であつたので，その唱酬の中には後の詩獄に問題とされる詩もあつて，この為には官は進まず，樂清知県から崇徳知県を経て朝請大夫輕車都尉で終っている。

三 近州の耆宿たち

蘇軾が杭州に通判として在任中，この地方の耆宿の中には，彼を招いて酒燕の席を共にし，詩を唱酬したものが何人かあつたが，いまそのうち最も著しかった張先と刁約について述べよう。

この二人は『宋史』にも『東都事略』にも伝がないが，『東都事略』の梅堯臣伝の末に「同時に張先子野，刁約景純あり。皆文名ありて其の事を逸す」とあり，蘇軾にも「贈張刁二老」と題する詩があるから，二人は当時文人として並んで称されていたのである。

張先，字は子野，烏程の人。陸心源の『宋史翼』の文苑伝に『談志』『古今詩話』『過庭錄』『書録解題』『王臨川集』など宋人の著作から引用して張先の伝をなしているが，博渉とは言えない。それよりも，夏承燾氏の「張子野年譜」（『唐宋词人年譜』所収）は，事蹟と繫年の考証に於て最も精緻である。その経歴の概略を述べると，天聖八年四十一才で進士に登第し，明道元年宿州掾，康定元年呉江知県，翌慶曆元年嘉禾の判官，皇祐八年永興軍通判，皇祐四年渝州知州，嘉祐四年虢州知州，翌五年都官郎中を以て致仕した。時に年すでに七十一才，湖州に或は杭州に住した。早くから詞の作家として知られ，「張三影」の称は人口に膾炙していた。その詞は「子野と耆卿は名をひとしくするも，時に子野は耆卿に及ばずとす。然れども子野の韻の高きは，これ耆卿の乏しきところ」と評されている。柳永と時代を同じくし，長調の，慢詞の作家として，「張三影」の名は「柳三變」と並んで称されたが，張先が柳永に及ばずという評価は，その鋪叙の手腕からすれば公平であり，格調の高さで張先が勝るとするのはいささか過褒の嫌がある。しかし北宋有数の詞家で，その作が宋代には大に流行したことは宋末の詞人周密の家に京師出版の張先の詞集『安陸集』があり，時の湖州知州がそれを

もとに新版を起す計画であった（『齊東野語』）ことから知られる。

蘇軾の詞作は、現存の『東坡楽府』によると、杭州通判在任中の熙寧五年からはじまり、六年を経て七年に至ると俄然活潑となる。張先は六年、杭州にあった。前年来蘇軾と詩の唱酬をなし、この年には詞の交流も考えられたが、七年陳襄の離任、楊繪の着任を機に蘇軾らの詞の唱酬に参加して多くの作品を残している。この時期の蘇軾の詞には離筵の作が多く、綺羅香沢の態を一新したというほどではないが、すでに『詩を以て詞を作る』と評された独創的な詞風の萌芽が見られる。蘇軾のこのような新しい傾向は、この詞の唱酬集団での長老格である張先の長調を好む詞風の影響を受けるのは当然であった。

ただ蘇軾は「子野の詩筆は老健、歌詩はその余波のみ」と、詩人として高く評価している。張先の詩の今に残るものは、夏氏の年譜に見えるもののほか、『永樂大典』引用のものを加えても二十首を出ない。注1そして、その中には蘇軾との唱酬の詩は一首もないが、蘇軾の張先に贈る詩乃至は和詩があるのによって二人の交を見得る。熙寧五年十二月蘇軾は運塩河の開鑿を監視するため湖州に赴いた。その時の作の「和致仕張郎中春日書事」が二人の唱酬の最も早い作である。蘇軾と張先の交は、これから六年後の元豐元年八十九才で張先が歿した時に蘇軾の作った祭文に「我杭に官となって、はじめて擁篲するを得たり」とあるから、このときが交友のはじまりであろう。張先はこの年に「十詠図序」を知州孫覺に書いてもらっている（「陳振孫十詠図跋」）。孫覺は前年十一月湖州知州に着任しているので、もし夏氏の説の如く張先の「醉落魄」詞がこの時の作とするなら、その中に「南園百卉千家賞、和氣兼春、不独花東上」という句があるようにこの年の春のことである。この年の十二月に蘇軾が和した張先の原韻は春の作であるから、十二月に湖州仁寿坊の張先を訪ねた時張先の作に和したものである。蘇軾と孫覺はそれより早く交誼があり、張先と孫覺はこの年の春に知りあっていたから、二人の交りを周旋したのは或は孫覺であったかと思う。それかあらぬか、翌六年正月元日の「元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作」は、蘇軾が熙寧五年七月に作った「宿余杭法喜寺後緑野堂望吳興諸山懷孫莘老之作」に張先が和したものに蘇軾が次韻したものである。張先が七月の作に数箇月もおいて次韻しているのは、張先が孫覺によってこの作を知ったからであろう。

蘇軾は詩中で張先の詩詞を如何に評していたか。「元日次韻」詩で、「酒社我為敵、詩壇子有功」と、酒量ではともかく、詩では敵し得ぬことを言うし、「和致仕張郎中」詩では「不禱自安緣寿骨、深藏難没是詩名、淺斟杯酒紅生頰、細琢歌詞穩称声」と、張先の詩名世にかくれもなく、詞は字句の雕琢を好んで声律に称うという詞の特徴を詠んでいる。張先の詩の評は蘇軾の詩中ではこれに止まるが「祭張子野文」では、「清詩俗を絶し、甚だ典にして麗、物情を搜研し、幽翳を刮発す」と詩を抽象性から具体性に傾かせたことを述べている。熙寧六年冬に

は蘇軾が「張子野年八十五，尚間買妾，述古令作詩」を作っている。張先の寵姫に関しては、先にあげた蘇軾の詩の中にも詠んでいるが、この詩は戯れの詩とは言え、いささか敬意を失したものがある。「柱下相君猶有齒，江南刺史已無腸」と、蘇軾は自らを劉禹錫にたとえるはよいとしても、齒を失ってから乳母妻妾百人の乳を飲んだ漢の張蒼を以て張先にたとえている如き、老齡にふさわしからぬ絶倫の精力を戯笑しているとしかとれない。しかし張先と蘇軾はこの程度のことでは心象を害ねる程の間柄ではなかった。張先は湖州に蘇州に、蘇軾としばしば燕席を共にして詩の唱酬をなし、「歡欣して年を忘れ，苛細を脱略する」という三十六才の年齢差をものともせぬ，極めて自由な交であった。

刁約，字は景純，丹徒の人である。『宋史』や『東都事略』に伝はないが，著者は南宋末期の人と推定されるだけで，氏名不詳の『京口耆旧伝』にかなり詳細な行跡が見える。陸心源の『宋史翼』の刁約伝は，これをそのまま収めたものである。このほか蘇軾詩「哭刁景純」の題下の『施注』や，王安石詩「藏春坊詩献刁十四文学士」の『李壁註』は，簡略ながら「京口耆旧伝」の缺を補うに足るものがある。

刁約は若くして文章にすぐれ，天聖の初応挙の爲上京した時，欧陽修・謝厚・富弼らと声高下したという。景祐二年十一月，諸王教授の刁約が草した表が，宗室諸子への南班の授をもたらししたのも，彼の文辞がすぐれていたためであった。宝元中館閣校勘となり，康定元年十月には礼書を修める命をうけ，慶暦元年五月には知太常礼院となり，同年十二月編修官として参画していた『崇文総目』が完成して集賢校理管勾三館秘閣となる。進士合格以後刁約は欧陽修と職を共にすること多く，朋友として官界を雁行して順調に進んでいたが，慶暦四年十一月，蘇舜欽が進奏院祠神に奏用故紙の売却代金での燕飲の席に列したことが刁約の運命を狂わした。この燕飲は例年の行事であるのに，これを瀆職として摘発されたのは蘇舜欽の舅になる宰相杜衍を失脚させるために王拱宸らが策謀したものであるが，刁約がそれを知りながら告げずに席を離れて逮捕を免れたという『後山談叢』の説は正しくない。この件で，海州通判に貶せられた。その後皇祐中，集賢校理をもって，吏部員外郎判南曹を権ね，ついで開封府推官として，前途が開けるかに見えたが，至和元年十月，その正月歿して後温成皇后を追冊された張貴妃の葬に「温成皇后の壙中のものに侈麗多し」と私言して，提点京西刑獄に落された。その後，嘉祐元年八月には契丹国に使し，帰国後判度支院仮太常少卿直史館となり，四年には両浙転運使，判三司塩鉄院となり，提点梓州路刑獄となった。八年には再び判鉄院，戸部郎中にもどり，治平中知揚州となり，更に宣州に移った。英宗は宮邸で刁約を知り即位のはじめ彼を用いようとしたが宰相に刁約をすすめる者なく採用されなかった。当時同年の欧陽修は，嘉祐六年参知政事となつてからは

韓琦とともに仁宗の政治を補佐し英宗の皇嗣となるに預って功があるまでに昇進していた。熙寧の初、判太常寺、議講読官となったが官は進まず、間もなく掛冠した。館閣の職を歴踐すること四十年を越えて、同僚の榮達をよそに、代々の簪纓の裔にかかわらず官途の進まなかったのは、権要に干詣するを肯じなかった剛毅な性格の故であつたろう。しかし性結交を好み、京師にある時も賓客故人常に門に満ちたというが、潤州に帰休後も邸内の蔵春塢に故旧と唱酬を楽んだ。王安石の「蔵春塢詩献刁十四丈学士」に、「蒜山東渡得林丘、邂逅籃輿亦少留、今日更知萊氏隱、暮年長憶武陵游、欲營垣屋隨穿剗、尚歎塵沙隔猷酬、遙約勾吳亭下路、春風深駐五湖舟」とあるのによつても、その頃の交友の様が察せられる。

蘇軾は熙寧六年冬から七年春夏にかけて、常・潤・蘇・秀の各州を往復した。これは六年冬、転運司からの檄により、その地方の飢民を賑すためであつたが、その際に蘇軾はこの大先輩に敬意を表し且つは寿考を賀する為潤州の刁約の居を訪れた。刁約は蘇軾を旧知の如くにもてなし、ともに名所をたずね、詩の唱酬がなされた。

「同柳子玉游鶴林招隱醉歸呈景純」という蘇軾の七律にこたえて、刁約は直ちに次韻してきた。蘇軾は復びそれに次韻して刁約に二首を贈ったところ、刁約はそれに次韻して二首の詩でこたえて来たので、さらにその韻に次して二首でこたえた。なお蘇軾の原韻に、柳子玉も二度次韻し、蘇軾も柳子玉に二度次韻しているので、この時の唱酬で原韻をふくめて計十二首が作られるという盛況であつた。柳子玉、名は瑾、蘇氏とは姻籍にあたり、蘇軾とは京師時代から交があり、蘇軾の杭州通判期にしばしば唱酬に加わっている人物である。これらの詩中で、「景純見和復次韻之二首」の「浅量已愁当酒怯、非才猶覺和詩忙」と、酒量とともに詩の力量も、蘇軾が和するに忙しいほどの名手であると奨めている。唱酬については刁約も自負する所があつたらしく、次韻した詩の中で唱酬の意を述べたものもある。それにこたえて「屢把鉛刀齒步光、更遭華袞照厖涼、蘇門山上莫長嘯、蒼蘓林中無別香、燭燼已殘終夜刻、槐花還似昔年忙、背城借一吾何敢、慎莫尊前替戾岡」と蘇軾の詠んでいるのは、刁約の詩を論じた作に比べると、自分の作とても比べられたものでないので論ずるに足らぬと謙遜し、刁約は即刻和してかえすが、自分は才力もつかい尽して更に詩戦をくりかえす心算はないと、自戒の意をのべているのである。蘇軾にもしこの句がなければ、刁約の唱酬はさらに連続していたに違いない。刁約の宴席では同席した謝某の作に和して「此夜新声聞北里、他年故事記南徐、欲窮風月三千界、願化天人百億軀」と、歌妓に遊里の歌を唱わせて、潤州の故事とし、刁約の風月世界をきわめるには仏がしたように身を千百億の弥勒に分つてそれをなそうという、縦飲して盃盤狼藉のさまが詠まれている。蘇軾の刁約を敬慕すること、張先に対するよりも厚かつたことは、密州に転じてからの刁約に寄せた詩に「何時却与徐元直、共訪襄陽龐德公」と、刁約を

諸葛孔明をしてつねに牀下に拝せしめた龐徳公に比するなど、廟堂に納れられぬ高徳の士として敬していたのである。それから三年後、熙寧十年刁約が潤州で歿した時に、蘇軾は彼を哭する詩を作った中で、「前年旅呉越，把酒慶寿考，扣門無晨夜，百過迹未掃，但知従徳公，未省厭邱嫂」と、杭州通判期の刁約との交歓の状を詠んでいる。註2

四 六客詞中の人々

熙寧七年九月、蘇軾は杭州通判の任期が満ちて密州知州に移る命を受けた。同じ月楊繪も翰林学士侍読として再び中央に戻ることにしたので、蘇軾は楊繪と同舟して湖州知州李常を訪ねて離任の挨拶をなした。李常は二人の為に湖州府子城東南雪溪の西に位置した碧澗堂で離筵を催した。当時湖州にいた張先と崇禧觀提挙で故郷に帰っていた劉述と、たまたま湖州を訪ねた監南康軍酒税の陳舜俞が参加した。席上蘇軾は「定風波」一首を賦して楊繪に餞すると、張先はそれに次韻して「定風波令」一首を賦して楊繪に餞し、さらに次韻して蘇軾に餞した。さらに張先は五人の同会者を楊繪、劉述、蘇軾、李常、陳舜俞の順に配し、最後に自身にも及ぶ「定風波令」一首を賦して、離筵の興趣は高潮した。この一首を六客詞、この会を六客会と呼んで、世に風流の韻事として誼伝された。註3 この六客会は杭州通判時代の蘇軾の交友の収束をなすものとして重要である。陳舜俞・劉述・李常について述べよう。

陳舜俞、字は令挙、湖州烏程の人である。『宋史』に伝はあるが、いささか補足しよう。慶曆六年六月裴煜らと進士に合格、嘉祐四年八月、明州觀察推官から才識兼茂明於體用科に五人の首席で合格し、著作佐郎簽書寿州判官事に除せられた。この時王安石は詩を以て彼の東帰を送り「君能壯歳収科第，我欲他時看事功」と詠んでいる。この時三四十才の間にあったこと、王安石が彼に期待をかけていたことが知れる。都官員外郎から屯田員外郎を以て山陰の知県となった時に、王安石の青苗法の令を奉ぜず、上書して時政を非難したため監南康軍酒税に貶せられた。当時剛直の士劉渙が廬山に住していたので、ともに廬山を遊覧して『廬山記』を編した。この書の李常の序によって、彼の左遷は熙寧五年であることがわかる。彼の「和部使毛某歌」に「五十休官何太早」とか、秦觀の「陳令挙妙奴詩」に、「五十僅補尚書郎」とあり、また制科合格時の年齢を考えると、熙寧七年には五十才に達していたであろう。宋史は軍にあること五年にして卒したというのは蘇軾の「祭陳令挙文」の「別れて二年にして歿す」というのとは符合する。陳舜俞の歿は熙寧九年のことである。蘇軾のことに親しかった周邠は陳舜俞の女婿であるので、周邠を介して二人は交をもったのであろう。蘇軾が密州から周邠によせた書簡によると、陳令挙は密州に赴く蘇軾と別をなすため、特に杭州を訪れ、更に湖州まで同行したのである。熙寧九年冬、密州から周邠に答えた書

簡に「ただ令挙の逝去せるは、人をしてまた此の世に意あらざらしむ。この公の寿ならざる所以を思うて得べからず。これが為に涕を出すを免れず」と言い、また翌十年「是れ何ぞ一たび奮うて顧みられず、以て斥せらるるに至る。一たび斥せられて復せず、以て死に至る」と悲哀に充ちた祭文を作っている。註4

劉述、字は孝叔、湖州烏程の人で『宋史』、『東都事略』に伝がある。『続通鑑長編』によると、熙寧二年八月、当時御史知雜事であった劉述が、御史の劉琦・錢顗とともに、王安石が参知政事となって踰年ならずして中外の人事囂然として安からざるは、彼が己が胸臆を肆にして法を軽んじて憚る所のないためであると上疏して、その罷免をもとめた。劉琦・錢顗は八月上旬貶せられたが、劉述は従前から坐していた刑部に判として刑名の勅を中書に封還したことを劾されて未だ伏していなかったので先ず二人が処分されたのである。司馬光・范純仁らの彼等を罪すべきでないという上疏があったにもかかわらず、月末近く劉述は江州の知州に貶せられた。そして翌年提挙崇禧觀に移った（拾補卷五）。劉述が王安石を劾したところ、蘇軾も監官告院として朝廷でその議論が問題にされていたから、互に知っていたはずで、熙寧七年蘇軾が公務で蘇州を訪れた時崇禧觀のある建康府から蘇州に来ていた劉述と虎丘で会して詩二首を作っている。しかし蘇軾と劉述の詩の唱酬は、密州に移ってから「寄劉孝叔」の一首があるだけで、その後間もなく歿したと見られるから李常とのように著しくはない。劉述が湖州での六客会の客にえられたのは、提挙崇禧觀という閑職で家のある湖州に帰っていたことと、劉述の父の劉余慶が、張先の父張維とともに六客会の本ずくと見られる六老会の参加者であったことである。また劉述が詞の作家であったことも、その会の客としてふさわしかった。『湘山野録』には彼の壮齡の作「家山好」一首が録されている。

李常、字は公択、南康軍建昌の人で、その伝は『宋史』、『東都事略』にある。ほかに『淮海集』の「李公行状」があってもっとも詳しい。李常はもと王安石と親交があって、熙寧のはじめ秘閣校理となり、更に条例司檢詳、右正言、知諫院の職につき、新法については王安石の議に預って来たが、青苗法の取息のことについてはじめて意見が対立した。その経緯を『続通鑑長編』によって見よう。熙寧三年正月、青苗錢の散給に関する官吏の不法について違法者を上聞すべき詔が出されたのは、右正言李常・孫覺らの青苗錢の取息に関する提挙官の不法の上言によるものであった。二月には、李常は常平の収息について、「その尤も甚しき者は、善良の給納の費を備うるに貫陌を虚認して、以て二分の息を輸するに至る」と言い、二分の息をとることを止めるよう上疏した。この李常の疏の処置について朝議が分れたが、神宗は李常に事実の分析を命じた。李常の反対を知った王安

石は怒って「君もと条令司に出ず。また嘗て青苗の議にくみす。今反って攻めらるるは、何を以て蔣之奇に異らんや」と李常を責めた(拾補卷七)。蔣之奇が濮議を以て師の歐陽修を誣したのは、恰も三年前の治平四年二月のことで、まだ人々の記憶から薄れぬ事件であったから、李常を忘恩の徒と見た王安石の憎悪が見られる。そして神宗の州県吏の名を明らかにせよとの再三の命に肯んぜず、諫官として分析すべきでない旨を主張した。さらに三月には、「王安石は文学を以て世に名あり。行義にて君を得たり。乃ち仁に本ずいて号令を出さず、義を考えて以て財賦を利す。而も乃ち陛下を佐けて此民を病ませ怨を斂むるの術をなす。……四海萬里毒を蒙って訴うるなし。臣安石に於て故旧の義ありと雖も、苟も私を懷いて言わざれば誰かまた朝廷の為に言う者ぞ」と安石を難ずる上言をなした(拾補卷七)。李常の処置はしばらく決しかねたが、四月に至って皇帝の營膳・遊宴の費が巨額にわたることを述べた李常の疏を進めることもあって、神宗は「事を言いて反覆し、専ら詆欺をなせる」罪を定め、李常を太常博士通判滑州に貶した(卷二一〇)

蘇軾と李常は同じ時期に中央にいて、ともに王安石に反対して地方官に出されたことで共感があったろうが、交をもつようになったのは李常が滑州貶謫後年余で職を復して鄂州の知州に移ってからのことで、当時杭州通判の蘇軾に黃鶴樓の詩を求めた時が初である。蘇軾は馮京から聞いた所を詩に詠じてこれにこたえた。これは熙寧五年の秋冬の頃である。この時李常は蘇轍にも同じ題の詩を求めているが、蘇轍は「賦黃鶴樓贈李公貳」の中で「前年見君河之浦，東風吹河沙如霧，北潭楊柳強知春，樽酒相携終日語，君家東南風氣清，謫官河壩不稱情」と詠むのは滑州の貶謫地で二人は会っているのである。熙寧二年八月蘇轍が三司条令司詳檢文字から河南府推官に出た後へ李常が入っていて、蘇軾は黃庭堅に答える書簡の中でも李常と相知ることの久しいことを言うから、或は蘇軾は弟を介して李常と交をもつようになったかと思う。李常はその翌々年には湖州の六客宴の招主となる。蘇軾との唱酬がもっとも盛になったのは、蘇軾が密州に移って以後のことで、詩獄の際は承受に譏諷ありながら官に告げざる故を以て罰銅を課せられた。黃州から李常に寄せた書簡に「直だ須く死生の際を談笑すべし、若し僕の困窮するを見て便ちあい憐まば、則ち道を学ばざる者と大しくは相遠からざるなり。……然れども朋友の義、専ら規範を務む。輒ち狂言を以て兄の意を広むるのみ。……兄に非れば僕豈にこれを発せんや。看訖れば便ちこれを火にせよ。知らざるものは以て詬病をなさん」と、交友の義の篤いことを述べている。

註1 『永樂大典』から葛本『安陸集』に見えぬ詩十一首を検出し得た。

2 姜亮夫氏も胡道静氏も刁約の没年を元豐五年とする。

3 六客会は村上哲見氏「詩と詞とのあいだ」(東方学三五輯)に詳しい。

4 陸游は蘇軾の祭文中辞旨最も悲しく読む人を感嘆流涕せしめると言う。